

はに「ハードルを置いてみよう」 平成31年1月16日

ある中学校の校内研究にて。各学年1クラスのこの中学校では、全教員が1つの授業を参観し、その後はワールドカフェ方式を取り入れ、ベテラン・若手の区別なく、気軽な雰囲気での研究協議を心がけている。



「これまでの授業実践の積み重ねからか、子どもたちが共に学ぼうという意識が高まっていると思うが、授業者の関わり方はどうだろうか？」

「多角形の外角の和の求め方について、授業者が生徒の思考を先回りして発言しがちだったように思う。」

「もっと生徒自身の言葉で『一般化』して言えるまで、授業者が『待つ』ことが必要では？」

「しかし、自分の言葉で説明できるくらい理解するまで、生徒が考える時間を確保するには、少なくとも今日の10倍の時間が必要じゃないか？」

「授業時数との兼ね合いもあるし、授業進度が遅れてしまうのはよくない。」

「しかしなあ……。待とうとは思っていても、つい言いたくなるんだよなあ……。」

ベテランも、若手も、一斉にうなづく。

「我々は、よかれと思って、生徒が乗り越えるべき『ハードル』を、取り除いてしまっているのかもしれない。」



「やはり、『待つ』というのも、教員の大切な役割ということか。」

「次の単元的时候には、もっと短時間で生徒が理解できるようになっているんじゃないかな。」

「生徒の『一生モノの力』を育むためには、いわば、生徒が少しだけ頑張れば『またげるハードル』を置くことが必要ってことかな。」

公開授業を基に、学校全体で教員が共有すべき課題へと、話題が広がっていった。

『はに』はコミュニケーションツールです。 みんなで語り合しましょう。

ご意見・ご感想は → inochi4027@pref.kanagawa.jp